

また蛭を応用する最善の手技として尾を切って吸血を促進したり、蛭が離れ落ちた後で吸角法を行ったり、出血が止り難い時は胆汁か熱した瀝青をつけると良いことなど述べた。

6. Avicenna は選んではならない蛭の種類を細かく述べ、一日前から水漕に飼い胃の内容物を完全に吐き出させ、応用する箇所を剃り皮膚をよくもんでから乾かし、砂糖水か牛乳で湿らせる。鼻孔や肛門に這入りこまぬよう注意し、充分吸血したら塩その他をふりかけて蛭を剥離され、吸角法を行って有毒成分が残らぬようにする。また完全に止血してから患者を帰すこと。発疹チフス、コレラ、天然痘の患者には禁止した。

7. Henri de Mondeville は大ていの皮膚病、熱病の他狂気等にも効くと言う。

8. Botallus は耳、鼻、指などの小さい部分に用い、側頭痛に左右 10 匹位を輪状に貼る方法を推奨した (16 世紀)。

16~19 世紀間の蛭療法には、あまり驚くような新しい手技の紹介は無かったが、応用は広く定着した。

9. 1775 年 R. Mead はうわごとを伴う熱病で、患者が体力的に泻血に堪えられない場合に蛭を用いると報告した。

10. 1815 年 Lettsom は突然うわごとを言い意識を失った患者の頭髮を剃り、冷してから蛭と吸角法を応用して、不成功と思われたが数日後急に治癒したと報告している。

11. フランスを中心に、百日咳の時に胃部に蛭を用いてひきつけを治したり、小児の歯牙萌出の際の発熱や痙攣も蛭で治療された。

12. イギリスでも 19 世紀になっても、方法はあまり変ることなく応用され、もちろん北米へも導入された。

一方、蛭の供給について言えば、フランスを中心に産業化した。医用蛭は極小から特大まで 5 段階の大きさとし色と産地 (ハンガリー、シリア、トルコ等) で流通した。いずれも *Hirudo medicinalis* の亜種である。ふつう千匹で 325~500 グラムの重量で、最大のボルドー産のものは 1 匹 33 グラム長さ 25 cm もあった。19 世紀始めには国内で間にあったが、じきに供給不能となり、スペイン・ポルトガル産も不足して、東欧からロシアにまで供給地を求めて需要を満し、英

国や米国にも輸出された。19 世紀中は、蛭が最も多用されたことがわかる。

19 世紀米国では一般医療用にも勿論、広く用いられたが、歯科畑で最も蛭の応用を推進したのは C. E. Kells であった。

感染根管を 1 回治療で根充までを完了する方法を Kells が発表したのは 1887 (明 20) 年であった。その後十数年間、この方法は米国歯科ジャーナルで活発に論議された。彼はこの方法をリッチモンド冠の創案者 C. M. Richmond から Knocking-out 法として教わった。彼の 1 回法は 1) 根管の拡大と石炭酸原液による完全消毒、2) ガッタパーチャの圧迫根充、3) 咬合削合と根端部歯肉にラウンドバーで Vent を作ること、そして腫脹予防のため、前日薬局に在庫を確かめておいた蛭を歯肉に応用することから成り立っていた。彼はその晩年本法の集大成を 1926 年 “Three Score Years and Nine” の一章にまとめている。

蛭の応用に関しては、1917 年 Dental Items of Interest にその詳細を発表した。根充後腫脹がそれ以前からあった場合は、直ちに患部歯肉をカーボランダム・ポイントで軽くこすり傷を作って、そこに彼の創案したスポイド状ガラス管に蛭を入れ、管口を歯肉に当て 10-20 分、場合によっては 30 分吸血させるのである。彼は、これは 24 時間以内に行わないと有効ではないと言う。

演者の一人森山は 1970 年 I. C. D. Scientific & Educational Journal に、本法を近代化し蛭を抗生物に代えたいわば Kells の現代版論文を発表し、翌 71 年本学会総会で「腐敗歯根管を即日 to 充填する方法の起源」を発表した。またその後数回にわたって 1890 年代の 1 回根充法について調査、比較研究を行った。

26) 古代中国の欠歯風習について

The Custom of Extraction of Teeth in Ancient China

医の博物館 陶 栗嫻

Suxian Tao, Museum of Medicine & Dentistry

中国には古代から西南方の民族に欠歯の風習があった。これは医療以外の目的で歯を抜去する行

為である。中でも近代まで欠歯の風習を持っていた民族は、仡佬族の中の打牙仡佬族と呼ばれている部族である。

仡佬族は晋代から四川省南部、雲南省東部、貴州全省、湖南省西部に住み、僚という民族の子孫である。打牙仡佬族は仡佬の一部族で、現在は貴州省普定に住んでいる。打牙仡佬の名が表れるのは明代以後で、その名が示すように欠歯の風習を持っていた。

中国に残る諸文献によれば、欠歯は古代に結婚や父母の死に際して、精霊や先祖の霊のたたりを防ぐことにあったのである。しかし、時代の変遷と共に本来の意義が忘れられ、後代には、美容のため或いは意味の分からぬまま、単なる習慣として行われることもあったものと考えられる。次第に打牙仡佬族の生活は漢民族化され、それに伴って欠歯という風習は約100年前に廃止されたという。

27) 1814 年米国で発行された Benjamin James の啓蒙書の書誌学的研究

A Studies on the Bibliography of the Informative Book on Dentistry Published in 1814 by Benjamin James in the United States

東京歯科大学 森山 徳長
○春日 芳彦
本間 孝

Norinaga Moriyama, Yoshihiko Kasuga and Takashi Honma, Tokyo Dental College

Crowly, Weinberger, Asbell など標準的な書誌学書によると、米国で最初に出版された書物は1801年 Skinner に始まり、1802年 Longbothom がそれに次ぎ、以後 Parmly や James また Spooner, そして Harris らの著作につながったとされる。

1910年米国で発行された Koch の History of Dental Surgery では、1800年代初めに心ある歯科医師が一般大衆の啓蒙のためパンフレット、評論や著書の出版を行った代表として、Benjamin James が「歯の処置法についての論議」を1814年ボストンで発行したことを、木版の図柄入りの扉

頁の挿図を掲げ記載した。1830年代末まで米国歯科医学書では図版を用いたものがなく、それが珍しいこともあったと思われる。

本学では Parmly の著書は所蔵しているが、Benjamin James の著書は無い。戸出一郎先生のご好意で鶴見大学図書館で閲読させていただく機会を得たので、今回その書誌学的概要を報告したいと思う。

鶴見大学所蔵本は180年の年月を経た書物としては保存と再装幀のしっかりした12折本、濃褐色洋装幀で、書誌学的構成としては、扉—1頁、扉裏は下半分に細字でマサチューセッツ州書記の出版許可登録証が印刷されている。扉の図版は腫れた頬に湿布を巻いた婦人の絵を中にはさんで書題が印字され、著者名は BENJAMIN JAMES, M. M. S. S. 発行所は Charles Callender, 印刷所は Joseph T. Buckingham, それぞれの所在地と最後に発行年1814年とある。

頁は目次が3頁目で裏は白、本文は5頁—125頁で中扉に付録の Peppy の人歯牙成分分析表と表題が書かれ、129頁以下0頁で終わっている。目次の表題と頁数を列記して、大凡の内容を示す。

No. 表題	頁数
1 読者へ	5
2 清潔について	11
3 冷水について	15
4 歯磨剤	17
5 歯痛	25
6 交感性歯痛	39
7 リュウマチ性、神経性歯痛	41
8 香具師の薬	47
9 歯の充填	53
10 歯の鑷去	57
11 歯の移植	63
12 義歯	67
13 抜歯	81
14 歯石	93
15 歯列異常	97
16 歯の萌出	103
17 歯の交換	111
18 患歯の継発症	115
付録 人間歯牙の分析	129

以上について詳説するつもりである。